

春日偶成

夏目漱石

道^う莫^なれ^か 風^{ふう}塵^{じん}に^に老^{らう}ゆと^と

軒^{けん}に^に当^{あた}れば^ば野^や趣^{しゆ}新^{あら}なり^{なり}

竹^{たけ}深^{ふか}うして^う鶯^{ういす}乱^{みだ}れ^れ嘯^{さえず}り

清^{せい}昼^{ちゆう}臥^がして^{して}春^{はる}を^を聴^きく

【作者】夏目漱石(一八六七〜一九一六年)(慶応三年〜大正五年)・江戸牛込に生まれる。幼名を金之助という。明治・大正時代の小説家、英文学

者。生家貧しくして、度々里子にだされた。一松学舎、成立学舎に学んで、漢学、英語を学ぶ。東京大学英文科卒。イギリスに留学、のち

【語釈】*道：云(い)うと同義。動詞。 *風塵：人の世。 俗世間。 *軒：てすり。 *野趣：素朴な自然のおもむき

*清晝：世間から。 かけはなれたしずかな真昼。

【通釈】俗世間の煩わしさの中で、すっかり老(ふ)けてしまったと嘆いてはいけけない。わが家の縁側の春の風情は、自然の清新ないなかのおもむきがあふれているから。竹藪は深々と茂り、鶯があちこちでさえぎっている。私は閑かなひる日なか、横になつて鶯の声を聞きながら春の情趣を味わう事が出来るのである。